特別読み物

今井俊満さんの壁画「東方の光」

大坪秀二（16期）

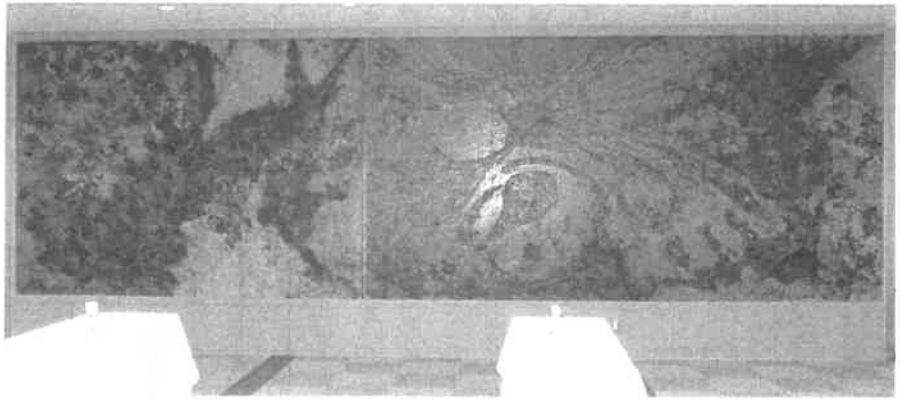
高校・中学が旧制以来半世紀近くを過ごした校舎（今の大学3号館）を離れて、濯川の南側に新築された現在の校舎に移転した一九六九年（以下紀年は西暦年の下二桁）の話である。それからでも、もう、四〇年近く経ってしまった。

私はその二年前の六七年に、学長、校長を兼務しておられた正田建次郎先生から教頭の職に就くことを命じられて以来、いわゆる「正田構想」という学園再編計画の実行の中で、期日の限られた仕事に追い立てられる、慌ただしい毎日を過ごしていた。

そのあげくに、建設中の校舎の足場から転落して腰椎骨折という大怪我を負い、一〇〇日を越す入院生活を送るおまけまで付いたが、何とか奇跡的に全快し、新校舎での新学年の発足には、硬い鎧のようなコルセットを着けてではあったが、元気に登校することができた。

その新校舎より少し遅れて、体育館、プール、集会所の建設が進んでいた。それらは、大手ゼネコンの設計施工によった新校舎と違って、建設資金全額を父兄会、同窓会の寄付に頼っていたせいもあり、学校側とより多くの親近感を共有できる同窓の建築家山田水城さん（19期理）に設計・監理を依頼していた。これは、建築全般について学校側のコンサルタント役をして下さった内田祥哉さん（17期理、東大建築学科教授）の薦めによるものであった。そして、これら三施設のうちで、集会所がいちばん早く六九年九月には竣工・開業の予定であった。竣工も間近に迫ったころ、山田さんから相談が持ちかけられた。

『集会所ホールの北東隅に鉤の手の耐震壁ができていて、これをそのままにするのは殺風景だ。せっかく今井俊満君という世界的に高く評価されている画家が同窓にいるのだから、



今井俊満作「東方の光」

彼の絵でこの壁を飾りたい。『建設費は決して裕かではないので、僅かばかりの謝礼に見合うほどの小さな絵が一枚ほしい。まわりの装飾は設計者として十分考えるから』と今井君に持ちかけたところ、すごく乗り気になってくれた。とにかく現場を見に行くと言ってくれた』

という話であった。（今井さんの世界的な業績その他については同窓会報第四五号『今井俊満君、追悼』（23期　祖父江昭彦氏）を参照されたい）

約束の八月九日、武蔵では正田校長、内田祥哉さん、山田水城さん、教師側建築委員の小林奎二先生と私とが今井さんを迎えた。

現場を見た今井さんは壁の大きさが気に入って、

「この壁全面を被う壁画を描きたい。ただし、自分は今日本に広いアトリエを持たないので、武蔵の壁画と同時に別の依頼者からの作品を描く場所を提供してもらえればそれで十分で、報酬は要らない」

と言われた。ちょうど夏休みなのと、新築まぎわでまだ万事が整っていないのが幸いして、自習室（図書室）隣のグループ学習室という名の部屋がまだ空いていた。そこを使ってもらって、早速に今井さんの制作が始まった。

煩わしい人目を避けて、仕事は暗くなってから、夜を徹して毎日行われた。私も、邪魔しないように気遣いながら、一度だけ仕事に取りかかるころを選んで見せてもらったことがある。助手を一人連れてきて、絵の具の調合などをさせていた。

夜とはいえ、夏のさなかの暑さの中で、シャツ一枚になって、アクション・ペインティングのような烈しい仕草で絵の下地を作っておられた。普通の油絵具ではなく、粉末状の絵具をボンドで溶いたものを用いて、容器をまるでバケツのよ

うに抱えて、ベニヤのパネルの上にぶちまけるような、迫力のある描き方だった。

私の記録を見ると、九月七日には出来上がった作品が集会所に持ち込まれ、予定された場所に取り付けられている。話が始まってからひと月足らずであった。作品のアイディアは、今井さんの頭の中に十分に練り上げられていたから出来たことだろう。

もう一つの作品（そのおかげで武蔵の絵は今井さんの寄付となった）が、いつの間に、どのように仕上がったのか、私は知らない。作品については今井さん自身が同窓会報に書いておられるので、その全文をこのあとに引用しておく。パリの画壇のみならず、世界の美術界で日本的個性をせいいっぱい発揮し、はげしいチャレンジ精神を貫いた今井さんの気持ちを、この一文は十分に伝えてくれると思う。

ただ一つ、この絵の制作時期を今井さんが一年間違えておられるのだけは、訂正させていただいた。

五〇年代の美術界に衝撃を与えた「アンフォルメル（非造形芸術）」運動の嵐の中で、アンフォルメルの若き旗手として注目された今井さんに、進化してやまぬ彼らしい転機が訪れたのは八〇年代に入ってからのことである。アンフォルメルと尾形光琳風とがみごとに融合して新しい今井風が世界に飛躍した。

武蔵のことはいつも心にとめてくれて、六〇周年の濯川蘇生計画でも、七〇周年の学園史募金でも、間近に行われた個展などの売り上げの少なからぬ部分を快く拠出してくれた。進化してやまぬ前衛精神の持ち主は「花鳥風月、飛花落葉」の古典回帰から「ヒロシマ」シリーズ、「小ギャル」シリーズなど、次々と新しい世界を生み出した。創作意欲は最後まで旺盛で、病に犯されながら令息の助力を得て壮絶とも言えるような創作を続けられたことが、テレビでも伝えられた。

旧集会所がとりこわされて図書館棟が新築されるのに伴い、「東方の光」の然るべき設置先が決定しないままに数年が過ぎた。この間、無為に時が過ぎたわけではない。幾つもの候補が挙げられ、消えた。そして昨秋、山崎現校長をはじめとする武蔵現職の方々の決断で、図書館棟の一階、大教室の壁面に、鉤の手ではなく今度はひとつの平面にして飾られることになった。二〇〇八年三月二九日、同窓生を迎えて毎年行われている「母校お花見の会」に披露された。この絵の誕生以来を見まもり続けてきた私としては、世界に羽ばたいた一人の画家の志を、武蔵の後輩たちに伝え続けてくれるべき新たな処を得たことに、言いようもない喜びと感謝とを感じている。

東方の光

20文　今井俊満

『武蔵高等学校同窓会会報』（第一四号より）

上の壁画は一九七〇年夏（今井さんの思い違いで、制作は一九六九年夏）の作である。一級上の19理の山田水城氏が設計された、新しい生徒集会場のためのものである。材料は油絵ではなく、水性絵具と粉絵具を水性のボンドで溶いたものを使い、ベニヤ板の上に描き、乾いてから塩化ビニールを塗って防水して艶を出してある。

「東方の光」という題名は光は東方よりからとった。パリで二〇年過ごした私には他を通しての日本（自己）の再発見ということが最大の課題であったし、既成の伝統諸様式は形骸にすぎず、伝統とはサンチマンであって自分の中に生まれながらにして持っているものであり、現代の国際造型言語によって現代の日本の新しい伝統を創る事、誰の模倣でもない個性的のものを生みださねばならぬ事、その意味でパリ画壇では殊に百%日本人でなければならぬ事。これらの事は武蔵の三大理想に本質的につながるものであり、その点武蔵での七年間の教育が私の海外生活や制作上いかに役立っているかは言うまでもない。この「東方の光」もこうした一つの決算ともいえる。日本の光は陰影礼賛であり、障子紙を通して入ってくるやわらかな光である。イタリアや南仏の直射の太陽がいっぱいといった光ではない。又日本の空間もピタゴラス幾何学の遠近法の様な有限空間ではなく、絵巻物や破墨山水、書に見られる様に連続空間又は空虚空間でいわば位相数学的空間である。この作品もこうした構造の上に立って描き、太陽、火山、日本庭園、石といった心の中の日本の風景を描いている。一見偶然的に見える手法も決して自己の放棄のオートマチズムではなく偶然を利用しながらそれをあくまで必然性にまでもってきている。作品は決して偶然であってはならず又秩序が必要だと考えるからである。そして私にとって絵とは自分の中に入りこみ、自分自身をめざめさせ、物事を発見していくため、自分が知らずにもっているものの確証のためのものである。